

山梨県立大学地域研究交流センター2020年度地域研究事業報告書

地域研究事業

研究テーマ

「助産師の社会的価値のリフレーミングとオンラインコミュニティ構築による可視化」

1.研究担当者

研究代表者（プロジェクト責任者：研究主体、コミュニティ運営管理）

・兼清慎一（国際政策学部）

共同研究者（助産師との連携、研究代表者への助言、情報発信支援）

・飯嶋玲奈（看護学部：母性看護学領域：助産師）

共同研究者（助産師との連携、研究代表者への助言・オンラインコミュニティ運営）

・岡雅子（助産師：笛吹市『おかげさま助産院』）

2.研究の目的

本研究の目的は、①助産師が有する社会的価値を捉え直しつつ、②その社会的価値をオンラインコミュニティの構築を通して可視化し、助産師と妊産婦双方の立場から、その効果と課題を明らかにすることである。

3.研究の計画と目的の修正

COVID-19感染拡大の状況や研究の進行に合わせて、計画と方法を修正した。感染リスクを考慮して、妊産婦へのヒアリングや参与観察を断念した。これに伴い、研究の目的を「助産師が有する社会的価値の捉え直し」に絞り込んだ。今年度は、仮説の検証ではなく、課題の発見と仮説の構築に注力した。

4.研究の背景

平成30年12月末届出分『山梨県看護職員就業状況』によると、山梨の助産師は、平成30年12月末現在、261人で、増加傾向が続いている。また、就業場所は、病院166人、診療所36人、分娩あり助産所に助産師が7人、分娩なし助産所で働く助産師が10人（出張除く）となっている。このように、病院と診療所が全体の77%を占めている。その一方で、地域の助産所で分娩を取り扱っている助産師の数は、0.0038%ときわめてわずかである。

このように、助産師の大半が病院やクリニックに勤務している背景には、出産場所が時代とともに変化していることが挙げられる。母子保健統計によれば、1950年に95.9%が自宅や助産所で出産していたのが、その後病院やクリニックに移行し、2018年のデータでは助産所と自宅出産あわせて0.6%程度にとどまっている。

山梨県でも、助産師の8割近くが病院・診療所、つまり医師がいる環境で働いて

いる。また分娩を取り扱う地域の助産所もきわめて限られている。このため助産師という存在が、社会において見えにくくなっていることが考えられ、助産師の社会的価値を捉え直し、可視化することには意義がある。

なお、山梨県では、平成 28 年に『産前産後ケアセンター ママの里』が開設された。Web サイトによると「妊娠中からの様々なご相談を受けたり、出産後の不安を解消するため、出産から 4 ヶ月後までのお母さん方は宿泊しながら、身体と心を休められる場と時間を提供する施設」とされている。

(<http://www.kenkoudai.ac.jp/sangocare/> 2021 年 2 月 26 日最終閲覧)

5.実施状況

研究チームでは、①先行研究の検討、②月に 1 回程度の研究会によるディスカッション、③オンライン投稿サービス『note』への投稿、④看護師へのインタビューを実施した。

6 月 30 日：研究会キックオフ：問題意識のすり合わせ

7 月 21 日：研究会：ディスカッション

8 月 25 日：研究会：オンラインコミュニティのコンセプトを議論

9 月 9 日：オンライン投稿サービス『note』にアカウント開設／投稿開始

<https://note.com/okagesama13>

10 月 20 日：研究会：ディスカッション

11 月 24 日：研究会：ディスカッション

12 月 8 日：研究会：研究課題の設定と明確化

1 月 20 日：助産所で働く助産師とのディスカッション（中止）

2 月 5 日：助産師 A さんインタビュー

2 月 17 日：助産師 B さんインタビュー

2 月 18 日：助産師課程 4 年生インタビュー

6.先行研究の検討

研究にあたり、先行研究を検討した。検討したのは、①地域の助産所や助産師の役割に関する研究、助産師の役割と価値を捉え直す視座として②制度と正当化に関する研究、方法論としての③価値のリフレーミングに関する研究である。

6.1.地域の助産所や助産師の役割に関する先行研究

まず、助産師の存在は、地域社会においてどのような役割や価値があるのか、検討した。

助産院などの地域の助産師は、妊産婦一人ひとりにより一層寄り添うことができ、信頼関係が深い（大谷 2008）。そもそも、助産院は、地域における公衆衛生的な存

在意義があり（宇都・北村 2018）、医療法第2条においても、「助産師が公衆衛生又は特定多数人のためその業務を行う場所」として位置づけられている。つまり、本来助産師は、分娩を主とする周産期のみならず、対象の「日常生活を整えることによる正常性の維持」に着目し、その人の生活をよりよくする役割を担っている。対象の一生に関わり、さらに世代を越えた支援をしてきた（中本 2020）助産師は、地域に根ざし、母子のみならず家族を含め、これまで広く地域社会を対象にその技を提供できる存在である。

助産師の社会的価値については、イギリスにおいては、助産師の役割や価値は法制度化されており、とりわけ、分娩において助産師は必要な存在という認識が社会に浸透（神谷・松岡・山名 2017）している。しかしながら、前述（4.研究の背景）のとおり、現代において、助産院等の地域で働く助産師の割合は僅少であり、その存在をあまり知られていない現状から、その役割や存在価値が社会に認められているとは言えないように思われる。

6.2.制度と正当化に関する先行研究

次に、助産師の役割と価値を捉え直す視座として、制度と正当化に関する先呼応研究を検討した。

助産師は制度である。制度は静的なものでなく、実践を伴い動的に構築されるものである（桑田 2015）。実際、助産師という制度は変化を遂げている（井澤 2018）。このため制度を分析するには、実践の行為を考察しなければならない。実践の行為は言葉で語られる。その語りは現実となることがある。これを行為遂行性という。この行為遂行性によって、制度は構築され、正当化されていく（山口 2015）。つまり助産師という制度は、助産師や妊産婦、その家族、医師たちが、助産師の実践行為をどう語るかで、変化しうるものと考えられる。助産師の実践行為はどのように語られ、その語りによって、助産師の価値や助産観がどのように構築され、助産師という制度がどう正当化されるのか。これが本研究の分析の視座である。

6.3.価値のリフレーミングに関する研究

本研究は、助産師の社会的価値の捉え直し＝リフレーミングを目指している。文化人類学者の伊藤泰信は、リフレーミングには文化人類学的視角が有用だと述べている（伊藤 2017）。それは異化、つまり異質馴化（異質なものを馴染んだものに変換すること）と馴質異化（慣れ親しんだものを見知らぬものにする）という二つの視角である。異文化の社会のなりたちを知ることで、自らの文化を相対化して振り返るきっかけとなる（山内 2017）。このような考え方を背景とし、本研究では、異分野（看護学部・国際政策学部）の教員が協働している。

7.オンライン投稿開始と問題提起

共同研究者の助産師2名が主体となり、オンライン投稿サービス『note』にアカウントを開設し、2020年9月に投稿を開始した。(これまでに12本記事を投稿)

<https://note.com/okagesama13>

『note』を使用したのは、①無料で誰でも参加できる、②月間アクティブユーザー数が6300万を超える規模のネットコミュニティである、③広告がつかず、自治体や大学など公的機関によるアカウント開設が増えている、ことなどが理由である。
(<https://note.jp/n/n705929417079> 2021年2月26日最終閲覧)

本研究では、助産師の役割や価値が知られていないという問題意識のもと、投稿を始めることとした。その過程で、「そもそも助産師として何を伝えたいのか」「そもそも助産師の価値とは何か」という問いが浮かび上がってきた。そこで改めて助産師の価値をめぐる対話を深めることとし、助産師へのインタビューを実施することとした。

8.調査

調査では、助産師との対話や助産師へのインタビューを通して、助産師の価値や役割、助産観を改めて聞き取り、記述することとした。

8.1.助産師の対話

まず、共同研究者である助産師の2名の対話である。

助産師ときくと、分娩や産後に専門性を発揮する人と思われがちである。若い世代に問うと、性教育のときに来た人、という位置づけで、具体的にどのようなことを生業としているかあまり知られていない。しかし、実際には、分娩期や産後だけでなく、分娩前の妊娠期からのケアにおいても力を発揮できますし、もっと広く考えれば、女性やその家族の一生に携わる専門家、という位置づけである。

また、対話では、以下のような発言がみられた。

- ・助産師の仕事が知られていない。だから役割を知ってほしい。
- ・ケアは産後に特化しがち。妊娠期は注目されていない。今は働いている女性が多くなっている。産後の退院も早い。退院したあと連携できればいい。少なくとも妊娠期から分娩、産後の指導の場として、助産師は活躍すべき。
- ・助産師は、妊娠期から相談できる、悩みがあれば声をかけられる存在。つまり、心のよりどころ。助産師には、話を聞いてあげるといっただけでも十分価値があるのではないか。
- ・(山梨県では)病院助産師が圧倒的に多い。育児技術などが煩雑化し、高齢出産、子どもがひとりだけという人が増えるなかで、助産師の機能や役割が見失われがち。助産師の価値を見出せなくなり、離職ということにも。

・(助産師が)分娩施設を開くにはハードルが高い。分娩には機械を使うという考えのようなものがある。訴訟リスクもある。分娩を扱わない助産師が増えてしまう。ただ、機械を使わないで(妊婦自身の力で)産めるからだづくりに貢献したい。

8.2.助産師 A さんの語り (8 年目)

次に、8 年目の助産師 A さんにインタビューを実施した。B さんは、県内の病院に勤務している。インタビュー日時は、2021 年 2 月 5 日 10 時 30 分から 12 時である。Zoom を使って実施した。A さんには、事前に調査の意図を簡単に説明して、半構造化インタビューを実施し、仕事の内容から助産観まで幅広く話を聞いた。その語りは以下のようなものであった。

「ひとりががんばって助産観をと考えていても、まわりの人たちも早く仕事をさばくことが第一義的になっている。助産師って、そんな役割だったっけ?と立ち止まって考える人が少ないのが現状」

「業務が忙しいし煩雑化している。ハイリスクの人が多い。助産観といっても、ゆったり過ごせない現場。でも、業務志向ではなく、お母さんと赤ちゃんとしっかり向き合う助産師の原点を考える機会を持ちたい」

「(助産師は)女性の体のスペシャリスト。お母さんと赤ちゃんに質の高いケアをできるのは助産師」

「女性の生涯に寄り添うのが助産師。ただ無事に生ませるというよりは、そこまでに向けた体づくりができるか。それを知ってお産をする人と、何も知らずにお任せでお願いしますという人とだと、全然お産の結果も変わってきますし」

8.3.助産師 B さんの語り (2 年目)

次に、2 年目の助産師 B さんにインタビューを実施した。B さんは、県内の病院に勤務している。インタビュー日時は、2021 年 2 月 17 日 13 時から 14 時 30 分である。Zoom を使って実施した。B さんには、事前に調査の意図を簡単に説明して、半構造化インタビューを実施し、仕事の内容から助産観まで幅広く話を聞いた。その語りは以下のようなものであった。

「ママが本来持っている産む力を引き出せる立場だと感じるけれど、もどかしさもすごくあって。病院で働くと、業務を時間内に終わらせることも求められ、陣痛が弱くなってくると医療行為につながることも。助産師に任せてくれて、もう少し我慢すれば自然に生まれるのになあと感じることもある」

「病院だと妊婦健診も忙しくて、ひとりひとりに関わる時間がなくて、しっかりしたケアができない。今は、ママの家庭環境とか思いとか聞く時間が全然ない。そういう部分も含めた関わりができるとよりよいケアができ、安心される存在になれると思う。ゆっくり丁寧に地域で関わられると素敵だなと思う」

「地域の助産師との接点はほとんどないです。助産師と関わって病院にくる妊婦はほとんどいない。自分も助産師をしていなかったら、助産院の存在を知らなかったと思う」

8.4.助産師課程所属の大学4年生の語り

次に、助産師課程所属の大学4年生Cさんにインタビューを実施した。学生にインタビューを実施したのは、本調査の継続を想定し、就業前と就業後の助産観の変化を把握するためである。Cさんは、県外の病院への勤務を予定している。インタビュー日時は、2021年2月18日14時から15時である。Zoomを使って実施した。Bさんには、事前に調査の意図を簡単に説明して、半構造化インタビューを実施し、助産師を目指した動機から現在の助産観まで幅広く話を聞いた。その語りは以下のようなものであった。

「いちばん女性のことはわかってあげられる存在でいたい。まだ働いてもないので、未熟でしかないけれど、ささいなことで悩んでいる人がたくさんいるので話を聞いてあげたい。まずは寄り添うこと、それが自分の中でいちばん大切にしたい」

「助産師は、女性だけではなく、女性を取り巻くご家族をはじめ、すべての人が関係している。もっと広い視点が大切。助産師に全く関わりのない男性、若くて産婦人科に通っていない女性は、助産師の存在を知らない。知ってほしい」

「子どもを産む方自体が減っていますし、産む方の条件、高齢化、出産する方に対するケアも変化していく。医療的に介入が必要な人は増える。残念だけど。自然な女性の力での出産を助けるのが助産師の大事な仕事。その助産師の本質は大事にしたい」

9.総括

本研究のまとめとして、今年度の調査研究を総括する。

山梨では、助産師の8割近くが病院・診療所、つまり医師がいる環境で働いている。また分娩を取り扱う地域の助産所もきわめて限られている。このため助産師という存在が、社会において見えにくくなっていることを、助産師自身が感じている。

一方で、病院における助産師は、業務が多忙で煩雑化しており、母親が持つ自然な力による出産を助けたいと思いつつも、なかなか実践できないジレンマを抱えている。

助産師自身は、助産師の社会的価値は、病院・診療所における分娩介助に限らず、女性の生涯に寄り添えるものであると考えているが、自らの助産観を練り上げる機会があまりない。

先行研究によると、助産師の役割と価値は、社会の中において構築され、変化を遂げていることがわかる。その役割と価値は、助産師だけでなく、妊産婦とその家

族はもちろんのこと、医師、看護師、助産師会、自治体等多くのステークホルダーによって構築されるものである。しかしながら、先行研究では、助産師という制度が社会的に構築される過程が必ずしも焦点化されていない。

山梨県の地域課題のひとつは、人口減少への対策であり、その中には子どもを安心して産み育てる環境づくりが含まれている。山梨における助産師という制度が、どのように構築されているのかを明らかにすることができれば、地域社会に大きな意義があると考えられる。

10. 研究の課題と次年度以降に向けて

本年度の課題として、助産師のインタビューの数が少なかった。特に地域の助産所で働く助産師について、共同研究者の岡雅子先生以外の方から、話を聞くことができなかった。当初、1月21日に実施する予定であったが、諸事情により、実施できなかった。

また、オンライン投稿についても、何を投稿すべきか、という一歩手前の段階で立ち止まり、助産師の役割や価値を再考することとなった。このこと自体は、研究を深める重要な契機であった。一方で、実際にはもう少し多くの投稿を想定していた。

さらに、当初は、助産師の役割や価値を知っていただくために、パンフレットも作成する予定であった。しかし、COVID-19の感染拡大等に伴う研究の進め方の修正もあり、今年度は断念した。

次年度以降の研究では、助産師が自らの実践行為や助産観をどのように語るのか。妊産婦が助産師の実践行為をどのように語るのか。こうした語りから、山梨県において、助産師という制度がどのように構築され、どのように正当化されているのかを明らかにしていきたいと考えている。そのうえで、このような語りをオンラインコミュニティに投稿し（投稿許可を得たうえで）、助産師という社会的価値を捉え直す場として構築していきたい。

11. 謝辞

本年度の研究にあたり、ご多忙のなか、多大なご協力を賜った、助産師の岡雅子先生、ならびにインタビューに応じてくださった助産師と学生の皆様に心より御礼を申し上げます。

また、研究を採択してくださった地域研究交流センター、ならびにサポートをしてくださった山梨県立大学社会連携課の保坂知子様、三科美月様にも心より御礼を申し上げます。

12.参考文献

井澤幸(2019)「助産所における妊娠・出産から継続した子育て支援に関する研究
2018年度日本福祉大学大学院福祉開発研究科博士論文.

伊藤泰信(2020)「文化人類学の視角と方法論を実務に活かす——ビジネスエスノ
グラフィの可能性と課題」八巻恵子編『企業経営のエスノグラフィ』東方出版.

神谷摂子,松岡悦子,山名香奈美(2017)「英国のバースセンターで働く助産師が働く
上で持っている考え」『日本保健科学学会誌』20(1): 13-23.

桑田耕太郎(2015)「制度的起業研究と経営学」『経営と制度』13:1-24.

中本明子(2020)「戦後の施設内分娩の急増期に助産師が行った妊産褥婦への保健
指導」『山口県立大学看護栄養学部紀要』13: 71-77.

大谷明希(2008)「助産所での継続ケアと地域での助産師の役割」『ペリネイタルケ
ア』,27(8).

宇都弘美,北村愛(2018)「助産所の地域での役割と助産師業務について」『南九州地
域科学研究所所報』34: 39-43.

山口みどり(2015)「イノベーションの源泉としての正当化—育児支援・介護業界の
事業創造プロセスにみる行為遂行性の類型」桑田耕太郎・松嶋登・高橋勅徳
編『制度的起業家』ナカニシヤ出版, 205-235.

山内裕(2017)「内在的デザインとその方法論」『組織・コミュニティデザイン(京
都大学デザインスクール・テキストシリーズ)』共立出版.25-47.